

論文要旨

論文題目 六朝志怪「搜神記」の傳世過程に関する研究

氏名 中村 友香

『搜神記』は東晋の干寶が著録したとされる説話集である。歴代の書目録等によれば原著は三十巻で、宋代以降に散逸したと考えられ、傳世資料として残されているものは、明人によって編纂された輯佚書であり、二十巻本と八巻本の 2 系統がその代表的なものである。また、埋藏資料として敦煌文獻にも句道興撰「搜神記」の題目を残す寫本と、それに類する寫本が數點あり、今日までの研究では、上述 2 系統の傳世資料に敦煌文獻系統を加えた 3 系統が主な「搜神記」のテキストであるとされている。

今日までの「搜神記」の傳世を巡る研究では、二十巻本『搜神記』が明末に編纂されたことについて、類書等の記事から編纂された書物であるという輯本説や、古くから傳わる何らかの「搜神記」の殘卷テキストを基に編纂されたという殘卷本説等があるが、學界では未だ統一した見解に至っていない。また、二十巻本『搜神記』と八巻本『搜神記』及び類書等の關連も指摘されているが、幾つかの假説に留まっている。敦煌本「搜神記」の研究については、近年の研究によって、現在確認されている 8 點の寫本が 3 種に分類され、そのうち S.525 寫本と八巻本『搜神記』は祖本を同じくする可能性が指摘されており、書寫や傳本の様子はより明らかとなってきているが、祖本を巡る考察については、まだ検討すべき問題が残っている。上述してきた先行研究より、具體的には、以下の 4 點の問題が挙げられる。(1) 3 種の敦煌本「搜神記」の祖本は同一であるか否か、(2) 假定される八巻本の祖本「搜神記」が 3 種の敦煌本「搜神記」の書寫と如何に関わっているのか、(3) 二十巻本及び八巻本『搜神記』の關連について、特に『天中記』という類書との前後関係はどのようなものであるか、(4) 二十巻本『搜神記』の編纂問題に於ける輯本説と殘卷本説はどちらがより現實的であるか、である。

上述した問題點を考察し、「搜神記」のテキストが傳世した過程をより明らかにするために、本研究は以下の五つの章によって論を展開する。

第一章 「搜神記」の傳世過程とその課題

第一章では、『搜神記』と題される書物について、書目録を用いながら歴史的變遷を整理すると同時に、3 系統の「搜神記」に関する先行研究を集約することを通して、「搜神記」の傳世過程を巡る問題を明らかにする。

第二章 3 種の敦煌本「搜神記」の祖本について

第二章では、敦煌本「搜神記」3 種の祖本について考察を行う。筆者は、敦煌本「搜神記」

の先行研究については、竇懷永氏・張涌泉氏が『敦煌小説合集』で成果を報告している研究論文が、現在の先行研究に於いて最も新しく假説も集約されていると考えている。そこで、両氏によって集約された、①敦煌本「搜神記」3種は祖本が別であるためそのテキストに差異が見られる、②傳抄者によって書き換えが行われたためテキストに差異が見られる、の2つの假説を参考としながら、どちらの説がより有力であるのかを検証する。本研究による調査の結論を述べると、後者がより合理的であると考えられる。

第三章 敦煌本「搜神記」と八卷本『搜神記』の関係について

第三章では、敦煌本「搜神記」と八卷本『搜神記』の関係について考察をする。竇懷永氏・張涌泉氏の研究に於ける新しい発見のひとつとして、S.525 寫本が八卷本『搜神記』の記事と甚だしく一致することを指摘したことが挙げられる。本研究でも、八卷本『搜神記』と S.525 寫本の間には密接な関係が見られることが確認されており、竇懷永氏・張涌泉氏の述べる八卷本の祖本「搜神記」が S.525 寫本の書寫の際に存在したという説に同意である。また、本研究では、敦煌本「搜神記」の他の2種と八卷本『搜神記』にも関係が認められる部分を見つけた。よって、3種の敦煌本「搜神記」が八卷本『搜神記』と祖本を同じくしていると考えられる。

第四章 二十卷及び八卷本『搜神記』の関連—『天中記』に着目して—

第四章は、二十卷本及び八卷本『搜神記』の関連について、特に『天中記』という類書との関連に着目して考察を行う。二十卷本『搜神記』の編纂に関しては、今日までさまざまな研究があるが、意見が統一しておらず、新たな視点から再考察を行う必要がある。そこで、本研究では、特に八卷本『搜神記』と二十卷本『搜神記』に収録される同じ内容の物語に注目し、すでに指摘される二十卷本『搜神記』の記事が、『天中記』を基にして、後に八卷本『搜神記』を用いて修補したという説が妥当であるのかを検討する。本研究では、『天中記』と二十卷本『搜神記』の記事は、そのプロットがよく似ているものの、異なる部分も見られ、また二十卷本『搜神記』には、八卷本『搜神記』と一致しない文字や、二十卷本『搜神記』にのみ見られる文字があることから、二十卷本『搜神記』の編纂に、『天中記』や八卷本『搜神記』が直接用いられた可能性は低いと考えた。

第五章 二十卷本『搜神記』の編纂問題と残巻本の可能性

第五章では、二十卷本『搜神記』の編纂問題と残巻本の可能性について探る。実は、敦煌本「搜神記」と二十卷本『搜神記』にはごく僅かではあるが、一致する文字が存在する。この点に着目し、資料を見ていくと、二十卷本『搜神記』の編纂時に古い何らかの「搜神記」に由来するテキストがあったことが想像されるのである。このような假説は、本研究だけではなく、二十卷本『搜神記』の編纂時には、残巻本の「搜神記」があったという假説がある。敦煌本「搜神記」の考察でも見られたように、經典化されていない抄本が傳え

られるなかで、同時に複数の異なる傳本が存在することがある。「搜神記」にもそうした複数の祖本が存在し、各々の書物がそれらを基にしていたと假定すると、テキスト間の複雑な文辭の差異についても解釋することができる。

結論

本研究の考察より、「搜神記」は次のように傳世してきたと推測される。まず、八卷本の祖本である「搜神記」のテキストが 9 世紀以前にはすでに存在しており、その八卷本の祖本「搜神記」が敦煌本「搜神記」が書寫される際に用いられたと考えられる。後に、八卷本の基となった祖本「搜神記」のテキストは、明末頃までに手が加えられながら傳世し、そのテキストを用いて八卷本『搜神記』が編纂されたと考えられる。また、二十卷本『搜神記』は、類書等を用いて干寶『搜神記』の再編纂を試みたものであると言われているが、類書との関連を細かく見てみると一概にそうとも言えない部分が存在しており、実際には類書等の他に「搜神記」に由来する何らかのテキストも用いられたと推測される。敦煌本「搜神記」にも見られたように、經典化されていない抄本が傳えられる場合、同時に複数の異なる傳本が存在することがある。「搜神記」にもそうした複数の祖本が存在し、各々の書物がそれらを基にしていたと假定すると、先行研究で述べられる『天中記』との記事の同異に於ける問題や、テキスト間の複雑な文辭の差異についても解釋することができる。筆者はこの複数の祖本が存在したという假説を抄本分支説とし、「搜神記」が傳世してきた過程に於ける新しい假説として指摘したいと考える。